

宮嶋資夫と大下藤次郎

——『遍歴』と『大下藤次郎日記』——

酒 井 敏

はじめに

大下藤次郎（明治三「一八七〇」〜四四年）は、丸山晚霞や三宅克己と並ぶ有名な水彩画家であり、その普及・啓蒙にも大きな足跡を残した¹⁾。また、師事していた原田直次郎を紹介して森嶋外の知遇を得、嶋外は大下の最初の著書『水彩画之栞』（新聲社 明治三四年六月）に「題言」、大下藤次郎遺作集『春鳥会 大正元「一九一二年二月」に「大下藤次郎年譜²⁾」を寄せ、小説「ながし³⁾」（『太陽』大正二年一月）を執筆している。

本稿では、その大下藤次郎について『文京区立森嶋外記念

館所蔵 森嶋外宛書簡集³⁾ う お 編⁴⁾（同館 二〇二一年一月）を編集する過程で得た新知見の中から、義弟に当たる宮嶋資夫（明治一九〇〇〜昭和二六「一九五一年」）との関わりについて紹介しようと思う。本書の編集に当たって、私が担当した中に大下の書簡があり、人名注を書くために関連の文献に目を通したのだが、管見の限り宮嶋との関係に言及した文献はなかった。大下に水彩画を学んだ俳人・鶴澤四丁の「大下氏の追悼会へ（雑司ヶ谷と上野）」（『みづゑ』大正二年二月）の記述について調査・確認して偶々気付いたのである⁴⁾。

確認してみると、簡便な辞典・事典には記載がないもの、さすがに『日本近代文学大事典』には、ちゃんと「義兄の水

「彩画家、大下藤次郎の書架を利用して文学に志し」との記載があった。宮嶋資夫に関心を持つ人々の間では周知の事実だったらしい。近代文学研究者として迂闊な話だが、まとまつた伝記研究は森山重雄の『評伝 宮嶋資夫 文学的アナキストの生と死』（三一書房 一九八四年九月）しかなく、『宮嶋資夫著作集 第七巻』（慶友社 昭和五八年一月）所収の黒古一夫編『宮嶋資夫年譜』以降、年譜考証にも目立つた進展はないようだ。宮嶋の伝記研究は活発とは言えず、私自身、プロレタリア文学に先行する労働文学の代表作でもある『坑夫』（近代思想社 大正五年一月）は読んでいても、伝記を読もうと思つほどの関心を宮嶋に対して抱いたことはなかった。文学研究者ではない著者による、大下関連の文献に記載がなかったのも無理のない話である。

しかし、両者の関係を意識して見直すと、大下自身が宮嶋について書き残していることに気付く。例えば、春子と結婚した明治三二年の「大下藤次郎日記」には以下のような記載がある。⁵

余が第一の家族として四月十四日妻春子は来れり姓宮島
父は貞吉と称し台南県庁事務嘱託員なり母はふみと云ひ

四谷伝馬町に住す弟三人第一を信康と云ひ十三才次を龍雄七才次文雄六才妹二人一をまさ子と云ひ十八才一を清子と云ひ十才春子は年二十歳なり春子に関する親戚には父貞吉兄宮島信吉姉種田某母方の親類には伯父村井一市叔母秋山しげあり⁶

傍線を付した「信康」が宮嶋なのだが、ペンネームの「資夫」でないのは当然としても、正確には「信泰」である。本名を誤記されているのは、関連資料を閲覧する便宜を得ても気付きようがなく、それは「大下藤次郎日記」が翻刻されても同様であろう。

そこで本稿では、主に宮嶋の自伝小説『遍歴』⁸を用いて「大下藤次郎日記」の行間を補いつつ、両者の関係を整理・確認してゆこうと思う。大下研究に新知見を提示する一方、『遍歴』等自伝小説の叙述や『宮嶋資夫年譜』の再検討を通して、宮嶋の伝記研究にも資するところがあれば幸いである。

明治三二年

まず宮嶋年譜の記載¹⁰を引用する（年齢は数え年）。

一八九九（明三二）年 一四歳／四月、長姉はるが画家の
大下藤次郎に嫁す。大下と資夫はあまり仲良くなかつたが、「芸術家」の義兄の存在は後の資夫に様々な影響を与えた。

「大下藤次郎日記」に拠ると、三月末に縁談が持ち上がり、四月八日に「真野氏及渡辺氏」を「媒酌人」として「結納を交す」¹¹。挙式は四月一四日で、以下のような記載がある。

午前四谷伝馬町宮島方に於て春子と結婚の式を挙げ午後より親類を招きて披露を為し四時の汽車にて春子と共に鎌倉へゆき材木座光明館へ投ず

大下は三月九日から宮島家に下宿していたが、それは友人の紹介で部屋を探して訪れた際に、応じた春子に好印象を抱いたことが理由であった。それにしても随分あわただしい印象を受けるが、土居次義は「家庭的な女性を求めていた」大下が

ほぼ要求する資格を持った女性にめぐり会って、その四月十四日に結婚することとなった。その女性は宮嶋春子
といい、当時二十歳であった。

と、ごく自然な流れであったように書いている。¹² 土居は生前

の春子夫人に取材して執筆しているので、おそらく春子夫人も同様の印象を抱き、無理なく結婚に至ったのであろう。

ちなみに、鷗外「年譜」には、

三十二年、藤次郎三十歳。四月十四日妻はるを娶る。岐

阜県土族にして、台南県庁事務嘱託員たる宮島貞吉の

長女なり。はるは明治十三年生る。母は秋山氏ふみ。

当時四谷伝馬町に住めり。七月一日藤次郎夫妻閑口駒井町の新居に移る。

とあるのみで、これ以上春子の系族には触れていない。重ねての引用は避けるが、現在のところ最も詳細な年譜である森清涼子編「大下藤次郎年譜」¹³も、その点は同様である。先に指摘した通り、こうした年譜類に宮嶋につながる記載がないことを確認しておく。

『遍歴』には、『日本近代文学大事典』や宮嶋年譜の記載に対応する、次のような叙述がある（『遍歴』の引用は『宮嶋資夫著作集 第七巻』に拠る。以下同様）。

幸ひなことに一番上の姉が、水彩画家だった大下藤次郎と結婚した。大下は私を生意気でずばらだと非難したが、それでも面倒はよく見てくれた。何よりも嬉しか

つたのは、いつでもおかれの書架を開放してくれた。今は疎開で取壊されてしまったが、小石川関口台町の、眼下に、その頃は早稲田の町もまだ茗荷畑だったのを下に眺める新築の二階で、ハンモックに揺られながら、本棚から次々に引張り出して来てはむさぼり読んだ時の愉快さは忘れられない。そこには西鶴全集もあれば、兄が集めて製本させた近松全集もあつた。博文館の何とか叢書には、スタンレーの探検記があると思ふと、イリアッド物語もあつた。…（中略）…その叢書には実に様々なものがあつた。それ等の書物が私の読書に対する眼を多少開いてくれたのであつた。¹⁴

義兄の豊富な蔵書を自由に読めるようになったのは、確かに「幸いなこと」だったろうが、おそらくそれだけではない。宮嶋は、「家の者とは誰とも仲が悪く、愛してくれるのは母だけであつたし、愛するのはすぐの弟だけだつた。」と書いているように、家族の中で孤立状態にあり、中でも春子とは「小さいときから、一番仲が悪」かつた。¹⁵「幸いなこと」には春子が嫁いで家を出たことも含まれていよう。この春子夫人与宮嶋との不仲も、大下関連の文献に宮嶋が登場しない理由

の一つになつていると考えられる。

ただし、大下が宮嶋を「生意気ですばらだと非難し」つつ「面倒はよく見」た様子を直接伝える叙述は、この年の「大下藤次郎日記」にはまだ登場しない。宮島家に関わる記載も少なく、拳式の二日前の一二日に「春子及弟文雄並びに真野氏を誘ひ新富座に少年劇を見る夜は松田に食事す」とあり、「家族及親戚の動静」の項に「春子里方宮島家にては初め四谷に住せしも九月十三日麹町富士見町に移り煙草業を営みたり家族皆無事なり他の親戚にも別条なし」と記されている程度である。¹⁶

宮嶋は当時「小さな時のばあや」の縁で「砂糖問屋の小僧」をしており、「家の中にあつては暴君で、疳癖が強く、怒れば子供でも何でも呼吸のとまるほど打ちのめす」ような父親も台湾に赴任中で、共に不在だった。皮肉な話だが、だからこそ「家族皆無事」だったのかも知れない。翌年から大下は宮嶋の「面倒」を見るだけでなく、義父・貞吉の帰朝が引き起こした宮島家の紛紜^{ユタウケン}にも巻き込まれてゆく。そんな事情から、大下の伝記で実家に言及されること自体、そもそも春子にとつて迷惑だったとも言えよう。

明治三三年

宮嶋年譜

一九〇〇(明三三)年 一五歳ノ春、父が台湾から帰る。夏、砂糖問屋を辞め、十日程羅紗屋の小僧となるがそれも辞め、晩秋三越呉服店の小僧となる。この三越時代に紅葉・露伴の小説や田岡嶺雲の文章を読み、文学志望の意志を固める。露伴に弟子入り希望の手紙を書く。

「春、父が台湾から帰る。」とあるが、「大下藤次郎日記」では一月二日に「宮嶋父台南より帰る直ちに訪問す」とある。年賀状や時候の挨拶には確かに「春」を用いるが、現在の感覚では「冬」。「正月」か「一月」と書くべきであろう。

宮嶋は「父が帰つて来たら、話をして学校へやつて貰ひたい」との思いから「砂糖問屋を辞め」たのだが、父は「冷淡で」「希望は何を言つても聞き入れてくれなかつた」。さらに「村井の伯父¹⁷」の反対も押し切つて「三越呉服店で小店員」となるよう強要、投げ槍になつた宮嶋も「母にも子供にも小言ばかり言つてゐる父のそばにはゐたくない」だけの理由で

「三越呉服店の小僧となる」。商人なんかになりたくない」
気持ちは、くすぶり続けたままだ。

新年早々、一月三日から七日まで、春子の弟妹の清子と龍雄が「来り泊」している。二人は七月二日から八月一六日にも「続いて泊」つており、それぞれ冬休みと夏休みを利用して泊りがけで遊びに来ているのである。

清子と龍雄が宮嶋に帰つて程なく、九日の夜から春子が産気づき、翌日「午前八時二十分男子出生」し、その日から実家の「母文雄と共に来り泊」し、「正月に生まれし男子といふのみならず又正しき男子なれかしと願ひて」「正男と名づ」けられた¹⁸一六日(お七夜)まで滞在した。文雄はまだ幼く、連れて来ざるを得なかつたのだらう。春子は産褥から回復した後、親戚回りも含め、二月以降毎月「里方」を訪ねるようになる。

宮嶋を除く兄弟姉妹は仲が良く、実家との交際ぶりも尋常と言えよう。ただ十月一六日と一八日に春子が里方で「一泊」、さらに二三日にも訪ねているのが少々気になる。不幸があつたかららしいが、一二月一六日に「四谷宮嶋家及村井家と衝突あり仲裁にゆき深更漸く局を結ぶ」ともあり、不穏な空気

が漂い始めているように読めてしまう。その翌日には春子を「宮島へ遣」しており、これが大下が春子の実家の紛紜に巻き込まれる始まりだったようだ。「家族及親戚」では「宮島家にては一月老父台湾より帰京し四月麹町の煙草店を売却して秋山に同居し五月頃元の住所伝馬町一丁目に移り爾来無事なり」と記しているのだが…。

また、真野紀太郎の「紹介にて竹下氏に始めて面会す」という六月二十七日の記述も見逃せまい。これ以後、展覧会に行したり訪問し合ったり、さらに互いの妻女も含めて交際を深めてゆく、この「竹下氏」こそ「此年に於て得易からざる親友を得たり」とされる人物であろう。そして、『遍歴』に

義兄も、この父と母との不和を調停しようとする可なり務めた。友人の竹下浩といふ、その頃の所謂精神運動家とともに、父と母に色々説いたのである。彼らは聖書を読め、と言った。彼らが常に主張する所は、日本の皇室も、聖書の教えに従つて、一夫一婦の生活を断行しなければいかんと言ふのであつた。

と記されるように、生活信条において大下の同伴者となる一方で、宮嶋や宮島家と大下との関わりにも巻き込まれること

となる。

宮嶋の文学志望と大下

そんな中で、宮嶋は文学志望を抑えかね、大下を相談相手に選ぶ。

十五六の時には、もう全く商業なんかいやになつて、文学に志した。大下に相談して…（中略）…自分の好きなことならどんな貧乏しても好いからと言つて父にも納得させるよう頼んだが、義兄は承知しなかつた。その癖かれも、自分の家が米問屋か何かであつたのに商売が嫌ひで画家になつたのであつたから、私の志望をあながちに排けるといふわけではなかつたが、ただ私の家が没落し、父母も已に老境にのぞんであることを思ふと、ともかくも自立して、生計の道を立てて、然る後ち、自己の好む文学に携はらしめたいと考へたのであらう。

『遍歴』では、先の大下の蔵書を読みふけたエピソードに続く叙述であるが、「十五六の時」とされているので、ここで取り上げることとした。結果として大下の回答やアドバ

イスに満足できなかったのは同じでも、そこに至る経緯は『裸像彫刻』の方が詳しい。

『裸像彫刻』では「相談」は二段階で、まず大下「に会つて、それとなく文学者になりたい希望をほめか」す。すると、大下は

花袋が兄の家にぞつと閉ぢ籠つて、独学で外国語の自修をした事や、また稀に見る努力家であることなどを話して、

『今にあの人はえらくなるだらうよ』と云つて

応えた。「先人のことを話してくれ」たのを「志望に必ずしも不賛成ではないと考へた」宮嶋は、未だ「それほど親しみもな」く「何となく気後れがした」ため「義兄に手紙を書いて、先輩作家の『書生にでも世話をして貰ひたい』、『それもいけなければ』、『どんな苦学しても』、『迷惑』はかけないから『自分の目的にだけ進ませて貰へるように』、実家の父母に『話して貰ひたい』と頼んだと言つ。

明記されてはいないが、前後のつながりから明治三三年三月頃と読め、大下は「花袋とはたゞほんの知合ぐらゐの間柄であつたらしい」とか、「有名になつた『重右衛門の最後?』」

もそれから三三年後に出た²⁰とかとも記している。この年一月二八日の「大下藤次郎日記」に「初めて田山録弥氏に面会す」とあり、さらに「交友」の項でも「新に得たる友」の一人として花袋が挙げられていることと符合しよう。交際が始まつたばかりで印象鮮明な花袋を話題にするのも自然であるし、三三年と推定して間違いないと考へる。

「二日はかりかゝつて恋文でも書くように」して書いたのだが、「希望を持つて待ち焦がれてゐた」大下からの返信は「懇切に書いてくれ」てはいても、結局、先の引用にあるような内容であつた。おそらく、事実は『裸像彫刻』に近く、『遍歴』では、当時の失望の大きさに焦点を当てて、要約したのであろう。

そして、『遍歴』の叙述は、ここから花袋ではなく鷗外を経由して、宮嶋と大下の文学観の違いへと展開してゆく。

義兄は非常に鷗外を尊敬してゐた。鷗外もまた義兄の亡くなつたとき、大下藤次郎といふ小説を書いた位であるから義兄に対して好意を持つてゐてくれたことと思ふ。義兄はよく私に鷗外の家の近所に住む学生の話をした。

学生は試験のとき夜更けまで勉強してゐたが、夜の一時

頃になつて窓を開いて見ると、鷗外の書齋にはまだ燈火がついてゐる。二時になつて見てもまだついてゐる。それが毎夜の事なので、学生はつひに閉口してしまつたといふことであつた。

大下は、このエピソードを「語る度毎に」「実に勉強家だからねえ」と「嘆息した」と言つ⁽²¹⁾。大下が、それほど深く「鷗外を尊敬してゐた」のに対し、宮嶋は「鷗外の作品は誠に好いと思ふが、大して好きにはなれ」ず、「露伴や晩翠を尊敬した」。他に「硯友社の紅葉や、詩では藤村が好き」な大下とは「作品に対する好悪の点でも背反した」のである。

それで、彼は私に、

「どうも、お前が好きで文学といふのは判らないよ」とよく言つた。或いはそうかも知れない。私は文学が好きだと言つても、文学以外の何物かを求めてゐたのかも知れなかつた。こうした作品に対する見解の相違も、私の作家志望に対する同感を薄めたかも知れないのだ。

後年の宮嶋資夫を知っている現在の我々は、彼が「求めてゐた」「文学以外の何物か」の正体を、すぐ思い浮かべられる。しかし、「ここで重要なのは「作品に対する見解の相違」＝

文学観の相違のために大下の賛成を得られなかつた、と考へている点であろう。先に「作品に対する好悪の点でも背反した」（傍線・酒井）と記していたように、それは文学観の相違に止まらず、例えば生き方や人生観の相違と重なつてゆく。そして、大下の回答に納得できなかった宮嶋の「文学志望は益々強いものとな」り、「露伴先生の許に、弟子にして頂きたい、といふ手紙を出」すこととなる。

明治三四年

宮嶋年譜。

一九〇一（明三四）年 一六歳／四月中旬、弟子入りの希望を持つて露伴を訪ねるが断られる。三越呉服店でストライキを計画し、指導者と見なされる。夏、脚氣を理由に家に帰り、そのまま三越呉服店を辞める。十一月、一ヶ月程簿記学校へ行く。

この年の「四月中旬」に「露伴を訪ね」たとするのは、「弟子入り希望の手紙を書」いてから間隔が開き過ぎて自然ではあるまいか。「遍歴」には、

露伴先生の許に、弟子にして頂きたい、といふ手紙を出したのもその年十六の春だった。返事を頂けなかつたので出かけて行つた。向島の堤の桜が散つて、海棠の花が咲いてゐた。

とあり、ここに「十六の春」とあるのが、露伴訪問を三四年とする根拠と思われる。月日は明記されていないが、「裸像彫刻」に「返事は来ないで二十日ばかり」経ってしまったので「四月の中旬過ぎ、私の公休を貰へる日に露伴を訪問することに決心した」と記されており、実際の公休日は「四月も末に近く、朝から春雨がしとく降つてゐた」らしい。いずれにせよ、露伴に「弟子入り希望の手紙」を送つてから訪問するまでを一続きにして、この年の年譜に記載すべきである。

そして、露伴に「弟子入り希望の手紙」を送つた宮嶋のふるまひは、鷗外に「水彩画の栞を寄せて序を求」めた大下のふるまひを髣髴させる。「尊敬」する相手に接近しようとする積極性は両者に共通しているわけだが、大下が自著を添えているのに対し、宮嶋が未だ作品を書いた経験すらない点に注意したい。さらに、大下が鷗外を訪ねたのは、「序」を贈

られた謝意を述べるためであつた。⁽²³⁾ 返事がもらえぬのに焦れて、露伴宅に言わば押しかけた宮嶋の押し強さは、大下にはない。大下から見れば、熱い思いだけで行動する宮嶋は直情径行に過ぎて、無謀で危なっかしく見えたらう。

だからこそ、まず生活の基礎を固めてから文学と向き合へという先のような助言になるのだが、それは宮嶋にはまどろっこしく、冷たい回答としか映らない。生き方や人生観の違いが露伴になるエピソードであり、二人のすれ違いが目に見えるようだ。いくら懇切にアドバイスしても、感謝もしなければ生活態度も改めず、同じような失敗を繰り返す宮嶋が大下には「ずばら」と映り、自分が好く思われていないことが宮嶋にも伝わつて来る。そんな関係が「あまり仲良くなかつた」の実態だったのであるまいか。⁽²⁴⁾

この年、大下は「五月二十一日駒井町の家を竹下に貸して、青梅千ヶ瀬宗建寺に移る」(鷗外「年譜」)。前年同様、長期の休み(一月と八月)に春子の弟妹が泊りがけで訪れたり、折々春子が実家を見舞つたりしているが、宮嶋家との空間的距離は大きくなつたわけだ。⁽²⁵⁾ しかし、「夏、脚氣を理由に家に帰」つた宮嶋も青梅を訪れるなど、両家の往来はむしろ活

発になっている。

『裸像彫刻』の「家へ帰つても矢張り水気は引かず」「十日程経つてから、青梅にある義兄の所へ行くことになつた」という記載に対応するように、八月八日の「大下藤次郎日記」に「信康来る」同二五日に「信康帰京す」という記載がある。宮嶋は「多摩川の岸辺で一夏を越す」、あるいは「一と月ほど青梅にぬ」た、などと記しているが、実際は「余程よくなつて」帰京するまで、暑い盛りの二十日ほどを大下の許で過ごしただけだ。強く印象に残つたらしい「多摩川の岸」で「美しい水の流れや夏の夕照」を見たエピソードは、おそらく「武内生及信康と共に羽村へゆく」とある八月一七日の写生でのこと。大下は「多摩川の夕陽」を写生し、一週間ほどかかって、宮嶋が帰京した二五日に完成させている。

また、一月一日に「宮島父及び大下兄を招き新年会を開く」、年末の十二月九日「四谷父来泊す」、同一日「四谷父帰京す」と記される一方、八月十日「四谷より母及文雄来る」、同二二日「四谷母、龍雄文雄久野帰京す」、一二月六日「信康来る」、同七日「信康帰京す」とあり、さらに、一二月二三日「午前東京癡家族及宮島母同伴箱根宮の下五段に投宿

す」ともある。「宮島父」と「宮島母・宮嶋が、お互いに顔を合わせるできないように、青梅を訪れている趣きだ。大きく変わった空間的距離を利用して、お互いに「ガス抜き」をしているのだらう。大下は、出京の際に何度か「宮島へ一泊」しているが、九月八日に「四谷に投宿夜分父の不機嫌にて大いに迷惑す」とも記されており、必ずしも快適な足溜まりではなかつたようだ（そのためか、「竹下氏方に一泊」と駒井町に泊まる場合も多い）。

大下は、この年の「家族及親戚」に「宮島家は家庭平和にゆかず屢々衝突ありて大に心懸りなり長男信康三井家に在りしも病のため解雇され方行不定」と記している。「家庭平和にゆか」ない宮島家と「三越呉服店を辞め」た宮嶋の「方行」、両方に心を配っている様子が窺えよう。青梅が一種の避難所になるのを納得・許容しているのも、「宮島母」を箱根旅行に「同伴」したのも、その思いの現れと思われる。帰京する「宮島母」を押し詰まった二九日に見送つて、大下一家は箱根で年を越すが、この箱根旅行のエピソードは『裸像彫刻』で簡単に言及されるだけで、『遍歴』には登場しない。²⁷⁾ 宮嶋にとつては迷惑でしかなかったからかも知れないが、もつと

大切にされるべきエピソードである。大下は「来秋を期して外遊せんと企て」「携へゆくべき水彩画を作るに多忙を極め、しかも六月に刊行した「水彩画の栞」によりて質問或は絵画の批評を求むるもの多く又世間一般水彩画の嗜好を生せしにや珍しくも注文を受くる事もある」中で、宮島家の紛紜にも多くの時間を割き、誠心誠意向き合っていたのである。

明治三五年

宮嶋年譜。

一九〇二(明三五)年 一七歳/六月、日本橋薬研堀の歯科医富安晋の書生となる。ここから国民英学会に通い英語を学ぶ。富安塾でもドイツ語、漢文、修辞学、心理学等を学ぶ。この頃から泉鏡花の作品を耽読する。

「親戚及交友」で「宮島にては久しく紛紜に日を送りしが五月頃喜久井町にて下宿業を営むこととなる」と総括されるように、宮島家の「紛紜」は改善の兆しを見せず、それに伴って両家の往来も頻繁であった。できる限り本年のトピックに焦点を絞り、前年の繰り返しに類する部分は省いて進める。

夫婦のいさかいから「捲き起る不愉快な空気が充満し、家庭は益々荒れて、冷たいものになつてゐた」宮島家で、年明け早々衝突があつたらしい。一月一四日に「宮島家の紛争につき竹下氏と共にゆき徹夜して尽力す」とある。「明治三三年」の末尾に引用した一説は、この時のエピソードである。

脚氣で家に戻つた宮嶋は、大下の計らいで「竹下の家に預けられ」て——つまり、大下が竹下に貸していた駒井町の家に住んで——いた。一つには宮嶋「が家にあると云ふことは「為めに」「ならぬ」と考えたからであり、もう一つには「精神運動家」である竹下の指導や感化を期待したからであつた。しかし、竹下は「六月京を去て大和十津川なる中学文武館に校長として赴任」(「親戚及交友」)することとなり、入れ替わるように、大下が六月二日に「青梅を引き払ひ」、一日に「駒井町住宅に移」つて来る。前年から計画していた「外遊」がいよいよ具体化し、手続きや準備が始まつていた(十月一八日サンフランシスコに向けて横浜出港)。これが「六月、日本橋薬研堀の歯科医富安晋の書生とな」つた理由である。

大下は「歯科医になつて、その傍ら、好きな文学をやつたら好いだらう」と勧め、独立できる職業を身に付けることに竹下も賛成したらしい。しかし、

かくて私は、歯科医となることとなつて、日本橋薬研堀の、富安晋といふ人の塾といふのに入つた。塾といふと体裁は好いが、徒弟制度の名残の書生である。…（中略）
…保証人には、義兄と竹下がなつてくれた。

と書いているように、宮嶋は必ずしも積極的ではなかつたようだ。「遍歴」でも「裸像彫刻」でも大下の「外遊」に言及していないのも、不満の反映かも知れない。しかし、「五年の期間」の修業を終えずに退塾した場合「その間の食費は弁済する」契約だつたと言つから、大下や竹下に金銭的な迷惑をかけた可能性もある。ただし、「大下藤次郎日記」には、駒井町に戻つて早々の六月一三日に「宮島家の事につき相談す好都合にゆかず大に迷惑を感じず」とある以外、この件に関わりそうな記載はない。

その一方、「健康」に「春子時々動氣ウツを起し三四日間床に就くことありて医療を受く五月以来網膜炎にて左眼を患ひ年を越ゆるも治せず」とあるように、春子の不調の記事が目立

つ。実家の問題のストレスが原因かも知れないのだが、それでも春子は繰り返し実家を訪ね、弟妹や母もしきりに大下宅を訪れる（「宮島父」は二月二十九、三十日の一回のみ）。宮嶋や宮島家が夫大下夫妻に及ぼした影響は決して小さくないと言えよう。

明治三六年

宮嶋年譜にはこの年の記載がないので、「大下藤次郎日記」の「親戚、交友」から、動静が読み取れる箇所を引用しておく。

○宮島は春来喜久井町の下宿業をやめ家屋を売却して四谷荒木町に移る不変紛紜絶えず○半田不幸にして夫婦別れとなり政子宮島へ帰る○信康は富安塾にて歯科を勉強せり○宮島母は七月より八月へかけて赤十字病院へ入院されたり

「外遊」中の大下は、六月二四日「神戸港に着」き、駒井町には海路横浜經由で二八日の夜に帰宅した。再び青梅に住まいを移すのは八月一五日。この間、例年のように春子の弟

妹が長期の休み（正月と春休み）に泊りがけで訪れたり、彼女の方から実家を訪ねたりしてはいるが、確実に大下が宮島家の人々と同座したと読める記載は、移転に先立って「荷物の始末を」した後「四谷宮島へとまる」とある八月一四日が最初である。

「富安塾にて歯科を勉強せり」には大下の麗しい誤解が混じっているらしく、「遍歴」を見ると、富安が「塾生に、手取り早く、歯科医の免許を取」らせようとしなのをいいことに、「神田の国民英学会に通つ」て英語を勉強したり「専門の書物よりも、文学書に心を引かれ」て「泉鏡花に心酔した」り、前年の年譜にあつたような生活をしていたのが実態のようだ。大下の期待からは遠ざかつていても、一月三日に「東京より信康来る」と一度登場しているだけで、宮嶋の日常は差し当たり平穏であつた。

また、「宮島母」の「入院」は、

母が痔瘻の手術をするために、青山の赤十字病院に入院した、痔瘻は手術しても多くは胸の病気になるといふので、母の寿命もこの先長くないように思はれた。

と書かれるように「痔瘻」で、宮嶋の予想は幸いはずれるが、

前年から続く春子の不調と父貞吉の帰朝以来続いている宮島家の「紛紜」は改善の兆しを見せていない。

この年の「健康」には、

春子は春来時々動氣スズメを催し又烈しき腹痛を催す事あり九月初旬には尤も甚しく同時に咽喉を痛む十二月下旬にも一三日臥床にあり其度毎に医を迎ふ眼病は四五月の頃全治せしも更に右眼に同様なる現象起り八月より東京へ一週若くは二週間毎に診療を受けるためゆくこととなれり但年を越えて治せず

とあり、むしろ悪化しているように見える。果たして、八月二九日「春子再び右眼を病み始む」、八月三十日「井上通泰氏の診療を受けるため春子東京へゆく」、八月三十一日「夕の列車にて春子帰り来る」と記されて以後、日帰りや一泊で上京した旨の記載が八回登場する。その際に実家を訪れたかは不明だが、「正男日記」の六月十日に「母上と共に宮島へゆく」とあるから、正男を連れてくる九月一五日と一二月二四日は実家を訪ねている可能性があるろう。

そして、先に触れたように不調の原因がストレスにあるとすれば、十月一八日「宮島事件に付飯田町へゆく」及び翌一

九日「宮島事件に付話をなし午後帰宅す」と、飯田町に宮嶋の伯父（父貞吉の兄信吉）を訪ねているのが見逃せない。

「事件」の内実が不明だが、九月十日「四谷宮島に一泊」、

翌日「宮島母を伴ひ青梅に帰」り、一五日「宮島母帰京す」

と、「宮島母」を青梅にかくまったような一連の記述が一月ほど前にある。先に見たように、この一五日に春子も正男と泊りがけで上京しているのは、あるいは母を送って行ったのかも知れない。何やら夫婦間にただならぬ気配が漂っているのが窺えよう。『裸像彫刻』には、大下夫婦に夫婦不和の「調停」を受けた晩に、貞吉が刀を振り回しそうになり、止めに入った母が卒倒してしまうというすさまじいエピソードが描かれている。この年の出来事ではなさそうだが、類する「事件」があったとすると、さすがに万策尽きて飯田町へ相談に赴いたのではなかったか。春子が、そして大下が、宮島家から受けるストレスは、この年さらに重くなったと言える。

明治三七年

宮嶋年譜

一九〇四（明三七）年 一九歳／四月、渡米を計画するがトラコーマのため断念させられる。富安塾も辞め、家を出てメリヤス職工になったり、絵草紙、絵葉書に彩色して自活する。この時、その後の十年間を運命づけた「原」という男と知り合う。絵草紙、絵葉書の仕事を手伝いに来ていた十四歳の少女常子に恋をし、激しい神経衰弱にかかり横浜に行く。自殺できず帰京し、早稲田で羊の牧場をしていた知人を手伝う。また、砲兵工廠の夫人にもなる。この頃「火鞭」を知り、社会主義に一時近づく。

『裸像彫刻』には富安塾に入る頃までしか描かれておらず、この年譜の記載は主に『遍歴』に拠っている。しかし、これらのエピソードは確かに登場してくるが、それぞれがいつ起こったのかについて、『遍歴』には明記されていない。「大下藤次郎日記」と比較してゆくと、むしろ矛盾が露わになる。

まず、前年同様、「親戚及交友」から関連箇所を引用しておく。

四谷宮島家砲兵工廠の用達をなし年末大いに景気よしの事母は不相変の情体なり政子信康一時職を執れり信康は例の歯科医を辞して竹下氏と同行渡米の筈なりしも眼疾のために意を果たさず

両者に共通して登場する、宮嶋の渡米一件は、

十九になつた四月に、竹下は自分の配下の青年を率ゐて、渡米する計画を立てた。そして私にも、日本にゐて、歯科の免状をとるためにあくせくするよりも、アメリカに行つて歯科の学校を卒業すれば開業することも出来るし、又アメリカで研究すれば、日本なんかにあるよりも、はるかに進んだことが学ばれる。

と誘われて「喜んで一行に加へて貰ふ事にした」ものの、乗船の「半月程」前にトラコーマに罹患していると判明、「荒療治」のかいもなく「税関の検査ではねられてすすご家に戻つた」というエピソードに基づいている。「大下藤次郎日記」には、四月二六日に「信康来り四泊す」とあり、五月二三日に「信康渡米の筈なりしも眼病のため横浜より歸る」と

あるので、前者が渡米についての相談とすれば、罹患の判明が五月上旬から中旬、短く見ても「計画」を聞いてから「断念」まで一月くらいは時間が経っているだろう。

以下も同様なのだが、時間の経過が圧縮されている印象を受ける。続く記載は、残り七箇月の間にあつたとするには、あまりに激しい転変であろう。これだけの転変がありながら、渡米一件を除いて、大下が何も言及していないのも不審である。

さらに、宮嶋は「家を出」て「自活」しなければならなくなつた理由を、「家は極度に疲弊して、母は下宿屋を始めてゐた」からとし、その下宿屋をしていた当時「原」という男と知り合つたように記す。しかし、「極度に疲弊し」は「年末大いに景気よし」と矛盾するし、宮島家が下宿屋を営んでいたのは明治三五年の五月頃から翌年の春頃までであつた。「大下藤次郎日記」が、よりリアルタイムに近い記録なのは言うまでもない。

また、「常子に恋をし、激しい神経衰弱にかか」つていた頃のこととされる、以下の叙述も矛盾を孕む。

母と父との間の不調和は頂点に達して、母は遂に家を出

てしまつてゐた。その行く先を知つてゐるのは私だけだつたが、母には当分誰にも語つてくれるな、と言はれたので、私は沈黙してゐた。そのために、義兄からは絶交された。が、もうそんな事はどうでもよかつた。

宮嶋の母の出奔も彼との「絶交」も「大下藤次郎日記」には記載がなく、七月四日五日として「東京より信泰来り泊る」、十一月一日に「信泰来り一泊して帰る」と宮嶋の来訪が二度記録されているのみである。二月一九日には「宮島母来る一泊して帰る」とあるが、出奔のような大きな事件を経ているとは見えまい。追いかけるように二日に「春子正男出京し二泊し帰る」と記されてはいても、「宮島母」を青梅にかくまつたかのような記事と比べると、むしろ先の「年末大いに景気よし」と響き合つていように映る。全てについて手掛かりを示せたわけではないが、指摘できた諸点だけを見ても、この年の年譜の記載は見直す必要があるう。

宮島家との交流にも関わるので、最後に春子の体調に触れておく。「健康」には以下のように叙述されている。

春子の眼病は二月の頃漸く治癒せり例の動気は婦人病に原因せりとて二三回東京水原氏の診察を受けたり猶青梅

に在て数回医師にかゝりたり

前年に「年を越えて治せず」と記されていた通り、一月八日より二五日まで「春子一週間の見込にて東京へ眼の治療にゆく」と記され、年初には他にも「春子少しく不快」（二日三日）や定期の通院を思わせる「春子出京す」（二日）など、不調を思わせる記事が散見する。それに配慮してか、例年とは違つて弟妹の訪問もない。あまり明るい年越しではなかつたようだ。

ただ、六月二五日より七月一日まで「春子動気、血の道大いに泣き苦しむ医師にかゝる」と記されはしても、七月二日から八月六日まで「宮嶋より文雄龍雄来り泊し」、八月七日から二一日まで「清子とまりに来る」と、夏休みには例年通り弟妹が訪ねて来ており、「正男日記」には「七月八月頃」として「東京より文雄龍雄清子等のよきお友達来れるをもてあるいは拜嶋へ又は巽河原、千ヶ瀬等へゆき水に入り小魚をあさる」と微笑ましい情景が記録されている。「正男日記」では一度にまとめて記されている「お友達」（＝叔父叔母）が、実は日を違えて訪れているところに、思春期に差し掛かつた成長が窺え、正男も「水に入り小魚をあさ」れるまでに大

きくなったわけだ。明るい雰囲気を感じられる叙述である。

同様に、九月二十九日から十月四日まで「病氣医師にかゝる」と記された春子が、七日から二泊で「正男を伴ひ出京」しているのは、順調に回復したからであろう。眼病も治り動悸の原因も診断がついて、春子の体調も好転してきているように読める。大下自身、四月に内外出版協会から刊行した二冊目の著書『水彩画階梯』が九月には再版されるなど「世評最もよく一般水彩画の流行は吾が作り」出したと感じられる充実した年だったからでもあるが、先にも触れたように、この年は宮島家も概ね平穏だったらしい。それも春子の体調に良い影響を及ぼして、ここ数年になく穏やかな年末を迎えられたように思われる。全体に漂う明るさは、その賜物であろう。

おわりに

先の「絶交」は、「その中に義兄との誤解もとけて」やがて解消、「『英学生』といふ雑誌を出してゐる」た山縣五十雄を紹介されたと言つ。明治三八年の宮島年譜に

義兄大下藤次郎の紹介で万朝報記者の山県五十雄の経営

していた東西社の『英学生』の広告取り、編集を手伝つたと記されるエピソードであるが、例えば明治三七年十月四日に「雑誌英学生の表紙をかく」や同一二月二六日に「出京諸処訪問し山縣氏宅にて奥田氏に逢ひ一泊す」など、関連しそうな記事は見出せるものの、明治三八年以降の「大下藤次郎日記」は残されておらず、直接の裏付けとなる叙述を求めることはできない。

また、宮嶋がリーフレット『労働者』の編集人となつていた大正四年の年譜には

六月、小石川水道町の故大下藤次郎の水彩画研究所に移り、ここで、大杉・荒畑らの「平民講演会」などを聞く。とあるように、大下の死後においても不思議に関係が続いた。しかし、これらはもはや本稿の範囲外であり、与えられた紙幅も尽きている。もう少し広い視野に立つて、同時代状況も含めて考察したかったのだが、これも別の機会を待つべきであろう。

大下藤次郎にせよ、宮嶋資夫にせよ、今日では一般の興味関心から遠く、徒らに長広舌を弄したと見えるかも知れない。しかし、「画業に直接関わらないとは言え、義弟宮嶋や妻春子

の実家の紛紜と大下が誠実に向き合い、これだけの時間と労力を費やした事実は、彼の人間性を考える上で看過できない重要な要素であろう。にも関わらず、大下の助言や援助に満足できなかった宮嶋の叙述からは、その事実が十分に読み取れない。一方、「大下藤次郎日記」は、断片的とは言え、宮嶋の動静を伝える一次資料である。特に、記録されているのが客観的な資料が残りにくい思春期から青春期、文壇登場以前の動静であるだけに、宮嶋の伝記研究において高い資料的価値を持つだろう。

本稿では、宮嶋年譜の資料となつた『遍歴』を中心とする自伝小説と「大下藤次郎日記」とを比較検討して、それらの一斑を示した。私からすれば、ふとしたきつかけで得た興味から始まった、言わば史伝執筆のためのメモのような試みであつたが、大下藤次郎・宮嶋資夫それぞれの研究に資することを願つて本稿を閉じたい。

注

(1) 後出「水彩画之栞」を始めとする啓蒙的な著書や雑誌。みづゑ(明治三十八年七月創刊)の刊行、さらに水彩画講習所の開設(明治三十九年一月、翌年九月、発展させた日本水彩画研究所が小石川に落成)と講習会の開催・運営などが特記される。これらにより水彩画ブームを牽引し、多くの後進が育つた。

(2) 本年譜は、土居次義が「水彩画家 大下藤次郎」(美術出版社 昭和五十六年七月)に「鷗外が大下家に所蔵された記録に基づいて作成したものであつて、大下伝の研究上貴重文献とされている」と記しているように、大下研究の基本文献として評価が高い。以下、本稿では「鷗外「年譜」と記す。なお、作成に至る事情は、須田喜代次「果たされた約束 大下藤次郎と森鷗外」(『大妻国文』49 平成三〇年三月)に言及がある。

(3) 前注(2)「鷗外「年譜」執筆の際に提供された資料中に含まれていたと思われる大下の手記「ぬれきぬ」を材源とする。

(4) 宮嶋本人は追悼会に出席していないが、末尾に列挙されている追悼会の出席者四七名の中に含まれている大下夫人春子の末弟で宮嶋家の三男・宮島文雄(昭和一五年頃まで演劇や映画で活躍した俳優)について調べていて、宮嶋と大下の関係に行き当たつた。以下、混乱を避ける便宜のため、宮嶋資夫を指す場合は「宮嶋」、宮嶋や春子の実家を指す場合は

「宮嶋」と記す。

なお、この文章は追悼会当日の鷗外の「記念演説」を筆録しているなど、鷗外研究における貴重な新出資料でもあり、詳細を森鷗外記念会の「鷗外」で紹介する予定である。

- (5) 「家族及親戚の動静」の項。引用は、川西由里「資料紹介 島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記(第3回)」(『島根県立石見美術館研究紀要』3 平成二十一年三月)に拠る。川西には「同(第1回)」「同1 平成一九年三月」、「同(第2回)」「同2 平成二〇年三月」、「同(第4回)」「同4 平成二二年三月」、「同(第5回・最終回)」「同6 平成二四年三月)もあり、この一連の業績によって同館所蔵の「大下藤次郎日記」が全て翻刻公刊された。本稿も多くを負っている貴重な労作であり、学恩に感謝申し上げる。

(6) 大下は「宮嶋」と表記しているが、前注(4)のルールに従い、「宮嶋」として引用した。以下同様。

- (7) 例えば、前注(2)『水彩画家 大下藤次郎』は、今日までの最も完備した評伝であるが、著者の土居次義は「はじめに」で「藤次郎の伝歴を一冊の本にまとめてはもらえないかという」春子夫人の依頼が、そもその執筆の契機であったと述べ、夫人が保管してきた「藤次郎画伯の水彩画、スケッチブック、日記その他の記録類」を利用して執筆したと記している。前注(5)「大下藤次郎日記」を含むこれらの膨大な資料は、現在、遺族から寄贈を受けた島根県立石見美術館に収蔵されている。

(8) 宮嶋が最晩年に執筆した自伝小説。当初は「真宗に帰す」と題されていたが、『遍歴』と改題されて没後の昭和二八年八月に慶友社から刊行。宮嶋には他に、同趣の「宮嶋資夫自叙伝 裸像彫刻」(春秋社 大正二一年一月、「全三巻にて完結」と予告されているが、二巻以降は刊行されなかった)

があるが、より近い時点での執筆という長所はあっても、大下については『遍歴』の記述の方が客観的で公平と考えられる。そこで、本稿では『遍歴』を中心に、「裸像彫刻」と森山の「評伝 宮嶋資夫」とを適宜参照することとした。なお、大下の死の前後を描いた小説「閃光」(『小説倶楽部』大正一〇年五月)や「人間随筆 大下藤次郎」(『サンデー毎日』昭和四年七月二四日)など、宮嶋は他にも関連する作品を発表しているが、本稿では扱わない。

(9) 前出「評伝 宮嶋資夫」の大下に関わる叙述は、専ら『裸像彫刻』や『遍歴』を始めとする自伝的内容の小説に基づいており、大下側の資料として引用されるのは鷗外「年譜」のみである。「大下藤次郎日記」は、宮嶋の伝記研究における貴重な新出資料となり得よう。

(10) 本稿では以下、前出「宮嶋資夫著作集 第七巻」所収の黒古一夫編「宮嶋資夫年譜」の「(一)履歴」を「宮嶋年譜」と呼ぶ。原本では、他に「(二)著書」「(三)選集・再録類」「(四)著作目録」を含む。

(11) 「大下藤次郎日記」や前注(4)の出席者から考えて、「真野」は確実に真野紀太郎であり、「渡辺」は渡辺六郎である

うか。親しい友人に頼もつとして、二人共独身だったため、このような形になったと言つ。

- (12) 前注(2) 『水彩画家 大下藤次郎』 「大下の結婚と三宅克己」の章。大下の結婚をめくって、章題にある三宅克己との間に面白いエピソードがあるのだが、本稿では割愛する。興味を持たれた方は同書を参照されたい。

- (13) 高階秀爾 『水絵の福音使者 大下藤次郎 評伝』 (美術出版社 二〇〇五年二月) 所収。以下、本稿では「森清」「年譜」と記す。

- (14) 「博文館の何とか叢書」からの連想で、その書き手として「抽斎の息子さん」を思い浮かべる叙述を「中略」とした。「洪江抽斎」は、宮嶋の座右の書だったらしく、『遍歴』の他の箇所でも言及している。詳細は拙稿「宮嶋資夫と森鷗外 大下藤次郎の義弟として」(『森鷗外記念会通信』213 令和三年一月) 参照。

- (15) 前者の引用から推して、宮嶋は文雄より次男の龍雄と親しかったようだ。『遍歴』には春子と不仲になった理由も書かれているが、偏見に基づく一方的な怨言とも読めるので、ここでは引用を控えた。『裸像彫刻』では、この傾向がより著しく、春子に関わる叙述もより多い。前注(4) 及び(8) 参照。

- (16) 「大下藤次郎日記」には「読書」の項もあり、年毎の読書記録を残している。全てを引用する紙幅はないので、この明治三二年分をサンプルとして以下に引用しておく。宮嶋が

「本棚から次々に引張り出して来てはむさぼり読んだ」大下の蔵書がどのような内容だったのか、より具体的に想像する一助ともなる。

- (17) 「はじめに」に引用した一節に登場する「伯父村井一市」と思われる。『遍歴』では「母の大伯父」とも記されるが、福沢流の独立思想で、塩原多助が生活態度の標本で、そのくせ伊藤博文に曾ては多少認められたことがあるといふのが自慢の人
- 新聞紙は読売及国民時事等交々首としてよみ時には中央朝日、毎日、都、万朝報等をみたり雑誌は太陽、文芸倶楽部、新小説、天地人、めざまし唄、美術、美術評論等書籍には温知叢書の各種、百家説林、真書大閣記、基督伝、徒(「信徒」アルイハ「基督信徒」カ・酒井注)のなくさめ、転業論、謡曲通解、大岡政談、自笑基(其力・酒井注) 碩全集、風来山人全集、逸話文庫、近世畸人伝、千山万水、天地有情、松むし陰むし、新声、千紫万紅、花影藤香、山紫水明、春花秋月、柳暗花明、明治十二傑 其他数種

- (18) この年から加わった「正男日記」の項。大下が子煩悩だった様子が窺われる。鷗外「年譜」には、命名の由来が「一月十日長男正男生る。正月に生れたるに因りて名づく。」としか記されていないので、敢えて引用した。

で、「乱暴と我儘」で親戚中から「白い眼をして見」られていた宮嶋を、「ただ一人」「相手にしてくれ」たと言つ。

(19) 「聖書」が登場しているが、宮嶋に「あなたもキリスト教を信ずるのですか」と訊ねられた大下が「いやあ、僕はどうも」と竹下と顔を見合わせて変な笑をしたことがあったと言つ。「信仰」の語を用いず、「生活信条」と記した所以である。

(20) 『重右衛門の最後』は、「アカツキ叢書」第五編として明治三五年五月に新聲社から書き下ろしで刊行された。

(21) これが事実なら、鷗外は眠らずに仕事をする、という神話は、早くも明治三二年には知られていたことになる。しかし、『裸像彫刻』には鷗外に言及した叙述自体が存在せず、このエピソードを後に聞いた宮嶋が「鷗外を尊敬してゐた」大下と結び付けた可能性も捨てきれない。この神話の起源に関わる叙述であり、裏付けが欲しいところである。「大下藤次郎といふ小説」が、「ながし」の誤記なのとは言つまでもない(前注(3)参照)。

(22) 『小倉日記』(『鷗外全集 第三十五巻』岩波書店 一九八九年一〇月)に「明治三十四年三月」九日。大下藤次郎著す所の水彩画の栞を寄せて序を求む。」とある。

(23) 前注(22)同「小倉日記」に「同前(二十二日。朝大下来り謝す。」とある。鷗外は三月一三日夜に新橋着、上京中であつた(四月六日まで)。

(24) 森山重雄が『評伝 宮嶋資夫』で
彼(大下・酒井注)は鷗外をもつとも尊敬していた。そ

れは文学的というよりは、鷗外が勉強家であり努力家であるという生活態度からであつた。大下も一寸の隙もないほど働く努力家であつた。大下が宮嶋に田山花袋のことを話したのも、花袋が独学で外国語の自修をしたことや、また稀に見る努力家であるためであつた。大下からみれば宮嶋は生意気ですばらにみえたのであろう。

と述べている通り、鷗外にせよ花袋にせよ、宮嶋の文学志望を聞いて彼らを話題にしたのは、確かに「すばら」を戒める意図があつたからであらう。聞くべき指摘であるが、『裸像彫刻』と『遍歴』とを無媒介に組み合わせた叙述になっている点は再考する必要がある(前注(9)及び(21)参照)。

(25) 移転に先立ち、荷物を送り出すなど引越準備のため、五月一四日に大下の「家族一同四谷へ移」っているが、こゝでちよつとした事件があつた。「四谷の洗場にて桶の中に大便をなし母親大に苦しむ」(『正男日記』五月十五日)。確かに春子は「大に苦し」んだらうが、傍目には何とも微笑ましい。

(26) 龍雄は、八月二日に東京から帰る大下に連れられて青梅に來ていた。入れ替わるように、七月二五日から來ていた清子が八月三日に帰京している。

(27) 『裸像彫刻』に
暮れももう僅かと云ふまでに押しつまつて來た時に、
義兄が青梅からひよこりと出てきた。そして暮れから新年へかけて箱根へ行くのだから、その時に母を連れて行

きたい。そしてその間私に四谷の家へ行つて、母の代りに働けと云ふのであつた。…（中略）…

三人の小さな弟妹と、矢蓋しやの父を相手に、飯の支度から、家の掃除までをやるのは、私にとつてつまらない骨の折れることだつた。…（中略）…十七歳の正月と

云ふものが、こんな風にして、陰気な中に来てしまつた。

とあるのみで、『評伝 宮嶋資夫』にも言及がない。自分勝手な思い付きのとばっちりで面倒な役割を押し付けられたようにしか読めないが、大下には夫婦を遠ざける一方で父子の融和を図る思惑もあつたのではあるまいか。

(28) 二四日は神戸泊。二五日は「大阪にゆき博覧会を見堺水族館を見山本へ立より竹下妻の墓参をな」し、堺泊。二六日に神戸に戻り、翌二七日「信濃丸に乗り横浜に向ふ」。神戸着から帰宅までに時間がかかっているのは、長旅の疲れを見せぬ旺盛な好奇心と、竹下との交際の深さが理由であつた。大下の性格や人柄が窺えよつ。

(29) 本来、両者に「ママ」を付すべきだろうが、引用原典は後者のみ。「はじめに」で指摘したように、ほとんど「信康」と誤記されているため、正確に本名が記された箇所「ママ」が付く皮肉な結果になっている。

（文学部教授）

本稿は、二〇二〇年度中京大学内外研究員制度（その他の研究員）の支援を受けた研究成果の一部である。機会を与えていただいた関係各位に感謝申し上げます。